



Michael B. First, Janet B.W. Williams, Lorna Smith Benjamin,
Robert L. Spitzer 原著, 高橋三郎 監訳, 大曾根彰 訳

SCID-5-PD

DSM-5 パーソナリティ障害のための構造化面接

西村勝治

パーソナリティ障害診断のゴールドスタンダードの日本語版が上梓された。前身である『SCID-II (DSM-IV II 軸人格障害のための構造化面接)』と同じ訳者の手による。本書には DSM-5 に準拠した「ユーザーズガイド」「評価者質問票 (SCID-5-PD)」「患者自己記入シート (SCID-5-SPQ)」が収載され、大変実用的で活用しやすい構成となっている。

パーソナリティ障害の臨床的インパクトは大きい。これを適切に把握することの重要性は、臨床家であれば誰もが実感する。しかし評価、診断は必ずしも容易ではない。さらに根本的な課題としてパーソナリティ障害の概念化をめぐる歴史的な議論の存在は周知のとおりである。DSM-5 では、DSM-IV-TR のパーソナリティ障害の診断基準がそのまま踏襲されると同時に、「パーソナリティ障害の代替 DSM-5 モデル」が特例的に付記され、さらなる研究が求められている。これまでのカテゴリーカルモデルからディメンショナルモデルへの、産みの苦しみがそこにある。両者のハイブリッドといわれる代替モデルは、特定のパーソナリティ障害の診断名に、パーソナリティの機能や特性に関する情報を特定用語を用いて併記することによって、パーソナリティの病理の系統的評価を可能にすることを試みている。米国立精神衛生研究所 (NIMH) の Research Domain Criteria (RDoC) とも連動しながら、この新モデルはさらに洗練されていく方向にあるだろう。

本書にもこのディメンショナル・アプローチが反映され、さまざまな工夫がなされている。たとえば、「診断サマリースコアシート」では各パーソナリティ障害の診断項目に対する評価得点をディメンジョン

的に用いることができる。

また、本書は臨床でスムーズに使用できるようにも配慮されている。例えば被験者とのラポールを形成しやすくするために、SCID-5-PD を用いた評価は DSM-5 の配置とは異なり、回避性などの C 群パーソナリティ障害から始まり、B 群の反社会性パーソナリティ障害が最後に評価される。

評価時間を短縮するために、スクリーニングのための SCID-5-SPQ を用いることもできる。あらかじめ被験者に回答してもらい、「はい」と答えた項目に関してのみ評価者が質問すればよい。また、特別に関心のあるパーソナリティ障害だけを取り出して評価することもできる。

SCID-5-PD 日本語版がわが国の精神医療にもたらす貢献はとて大きい。何より、訳文が素晴らしい。正確で、かつ大変こなれた翻訳である。この種の翻訳では正確さを期すために back translation を経て不自然な日本語になることが多いが、本書の質問項目は自然な臨床場面で投げ掛けられる質問のように被験者には聞こえるだろう。このため、研究目的だけでなく、日常臨床においてもストレスなく用いることができる。診断ばかりでなく、これまで気が付かなかった患者のパーソナリティの機能や特性が浮かび上がり、大いに患者理解に役立つことだろう。そのようなツールとして臨床の中でこそ、ぜひ、活用してほしい一冊である。

(東京女子医科大学教授・精神医学)

●B5 184 頁 2017 年 9 月 定価: 本体 5,000 円 + 税 医学書院刊